みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

Political Ecology of Kalahari Indigenous People in the Nature Reserve, Botswana (Feature Articles : Dialogue with Changing Africa / Changing Sciences : Past and Present of Japanese Ecological Anthropology)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 池谷, 和信 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00005867

特集：変貌するアフリカ・変貌する諸学との対話へむけて
－２１世紀のアフリカ研究と生態人類学

ボツワナの自然保護区とカラハリ先住民をめぐる政治生態学

国立民族学博物館　池　谷　和　信

近年，自然保護思想が世界中に広まるにつれて，ますますアフリカの多くの地域が人の居住の許されない自然保護区に指定されている。これに伴い，保護区内の地域住民のたちのき（displacement）を政府がすすめることで，政府と住民の対立する問題がアフリカ各地で起きている。本稿の目的は，ボツワナの中央カラハリ動物保護区の内外に暮らす人びとを対象にして，政府による保護区外への移住政策への対応を政治生態学の枠組みから把握することである。筆者は，ＮＧＯの関与する先住民組織の成立と活動内容をおさえると同時に，保護区内外での現地調査をすすめることにより，地域住民の政策への多様な対応を明らかにしている。本論は，国家，ＮＧＯ，多様な先住民との間の相互関係を記述・分析することから，地域社会における先住民運動の意義や自然保護区の利用や所有を正当化（レジティマイズ）するための論理について考察し，生態人類学の新たな枠組みを提示する。

１．自然保護と生態人類学

近年，自然保護思想が世界中に広まるにつれて，ますますアフリカの多くの地域が人の居住の許されない自然保護区に指定されている。これに伴い，保護区内の地域住民のたちのき（displacement）を政府がすすめることで，政府と住民が対立する問題がアフリカ各地で起きている。例えば，サハラ以南のアフリカに地域を限定してみても，自然公園内外に暮らす地域社会（狩猟採集民や牧畜民や農耕民など）と国家政策との対立関係をめぐって，数多くの事例研究が積み重ねられてきた（Arhem, 1985; 岩　井，1999，2001; 西　崎，2001; 池　谷，2001; Ikeya, 2001; 松田，2002; Dieckmann, 2003; 服部，2004 など多数）。

例えば，南部アフリカに広く暮らすサン（ブッシュマン，バサルワ）に対象をしぼっても，自然保護区とサンとの複雑なかかわり方が議論されてきた（Dieckmann, 2003; Hohmann, 2003; Hitchcock *et al.* eds., 2006 など）。そのなかでボツワナのハンシーディストリクトの中央カラハリ動物保護区（以下，リザーブと呼ぶ）は，この種の論議が活発に行なわれてきた所である（図１）。ここではリザーブに暮していたサンを保護区の外に移住させる国家政策に，海外や国内のＮＧＯも関与していて，地域住民とのあいだで論議を起こしているといわれる。例えば社会人類学者スズマンは，リザーブ問題に対する国際ＮＧＯサバイバル・インターナショナル（以下，サバイバルと略する）の方法がきわめてサン文化を「本質的」に捉えているとして批判する（Suzman, 2002）。その一方で，サバイバル側からの反論も認められる（Corry, 2003）。両者の論議の背景には，「先住性」をめぐる近年の人類学における「先住民論争」（the indigenous people's debate）が密接に関与しているであろう（Kuper, 2003; Kenrick and Lewis, 2004 など）[1]。

リザーブの外側に位置する移住地[2]ニューカデを対象にした研究も，最近になって蓄積されつつある。池谷は，1997 ～ 1998 年にかけて，移住政策に対してリザー

2006 年 7 月 31 日受付，2006 年 10 月 6 日受理
連絡先：〒 565-8511 吹田市千里万博公園 10-1
国立民族学博物館
e-mail: ikeya@idc.minpaku.ac.jp

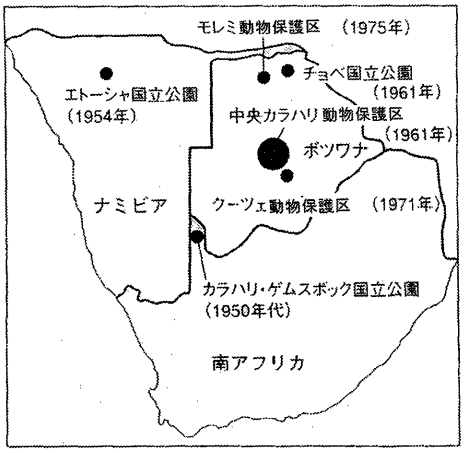

図1．南部アフリカにおける自然保護区の位置
( ) 内は，設立年を示す。

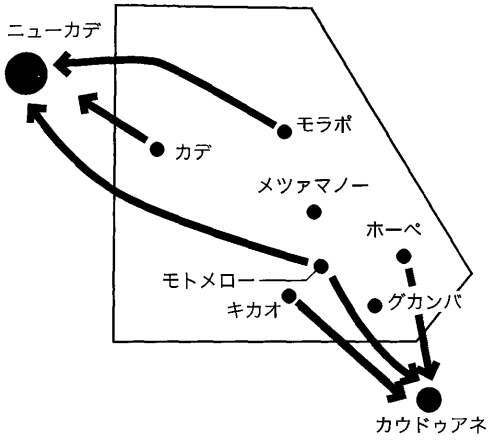

図2．中央カラハリ動物保護区の外側への人口移動
(1997-1998年)

ブの人びとの対応過程とそれに伴う社会変容を把握した（池谷，2001; 2002b)。その結果，リザーブ内の7つの集落において移住のプロセスが異なっていたことが明らかになった（Ikeya, 2001）（図2)。秋山は，1997～1998年にかけてニューカデの子供の社会関係への学校教育の影響を把握した（Akiyama, 2001)。高田は，1999～2000年にかけてニューカデの人口動態，生業活動，乳幼児の体重の3つの側面の調査を通して，民族アイデンティティなどの変化に言及した（高田，2002)。丸山は，2000～2001年にかけて，ニューカデにおける集落内と郊外における居住地の分化や両者の間の社会関係を論じると同時に（Maruyama, 2003; 丸山，2005)，対象地でのヘッドマンの選出過程とその背景を報告した（丸山，2004)。最後に菅原は，住民の語りを通してニューカデにおける暮らしぶりや政府への抵抗の論理に言及している（菅原，2004)。以上のように，1997～2001年までのニューカデの社会経済変容が1年単位で詳細に明らかにされてきたのであるが，これらの研究では，変化に影響を与えている政治経済状況の分析までふみこむことは少なかった。また，2002年以降の社会変化については言及されていない。

本稿では，南部アフリカの先住民としてよく知られるサン社会，とりわけ筆者が1987年以来，現地調査をすすめているボツワナ中部の事例に焦点を当てる。具体的には，国家，ＮＧＯファースト・ピープル・オブ・カラハリ，サバイバル)，地域住民（サン，カラハリ）という3要素を枠組みとして，2002年以降の政府の移住政策への彼らの多様な対応を把握することを目的とする。あわせて，彼らの生活のなかでのＮＧＯとのかかわり方や先住民運動の役割などを考察する。

さて，アフリカ南部に暮らすサンを対象にした生態人類学的研究には，文化生態学，歴史生態学，政治生態学[3]という3つの生態学の枠組みが同時に共存することがよく知られている（池谷，2006：84)。とりわけ，最後の政治生態学は，ミクロな人間活動とマクロな政治経済状況との関係を把握する視角であり（市川，2003：61)，地域のミクロなレベルでの人びとの生活と文化と，それらの枠組みを与えているより広い社会のマクロな政治・経済システムと地域社会における権力関係との関係を明らかにする必要がある（市川, 2003:62)。このためには，従来の生態人類学の基本とみられるミクロな人間活動の把握に終始することなく，マクロな政治経済システムを十分に把握するという壁を乗り越えなくてはならない。本稿は，その一つの事例として，越境する先住民運動と国際およびローカルＮＧＯの活動に注目して，グローバル化した自然保護運動への地域住民サンやカラハリの人びとの対応を示す。

ボツワナは国土の三分の二がカラハリ砂漠でおおわれており，総人口は約150万人を示す。民族構成では，ツワナを中心としてカランガ，ヘレロ，バエイ，ハンブクシュ，カラハリ（Kgalagadi）などのバンツー系，そしてコイサン系のサンが暮している。このなかでサンは，かつて南部アフリカに広く暮していたが，バンツー系や白人の入植によって，カラハリ砂漠の奥地に追いやられたといわれている。ボツワナでのサン人口は，約2万人を示す（Cassidy *et al.* eds., 2001)。なお，本稿で扱う地域ではサンのみが暮らす集落は存在せず，バンツー系のカラハリとサンとの混住になっている点に注意しておき

たい。このため，サンを中心とした先住民運動が盛んになるにつれて，バンツー系のカラハリが自らをサンと名乗るようになったりすることから，カラハリからサンへのエスニシティーの変化がみられるという現状がある。この点については，別稿で詳細に論じてみたい。

2．ボツワナの先住民組織の成立とその活動内容

ボツワナには，数多くのＮＧＯが存在するが，先住民サンの開発や運動に深く関わっているものとして３つの組織が挙げられる。まず，首都ハボローネには，ディチュワネロ（Ditshwanelo）という組織がある。ここは，人権問題を中心に広く扱っており，その一環として先住民サンに関わる問題をとりあつかう。とくに最近では，上述したリザーブ問題の状況とその背景などを含めた冊子を発行している（Ditshwanelo ed., 2002）。

国内で最も多数のサンが暮すハンシーディストリクトでは，その中心地ハンシーにファースト・ピープル・オブ・カラハリ（First People of the Kalahari, 以下，ファースト・ピープルと呼ぶ），そこから約 30km 離れたデカールにはクルー開発トラスト（Kuru Development Trust，以下，クルーと呼ぶ）という組織がある。ファースト・ピープルは，後で詳述するが，先住民運動を中心とする組織であり，クルーは，サンの自立的生活をねらいとして経済や教育を支援する組織である。サンのペインターを養成したり，サン集落に幼稚園をつくったりすることは，クルーの活動として知られる（池谷，1999:51）。なお，ウイムサ（Wimsa）は，南部アフリカの先住民サン連合を示し，本部はナミビアの首都ウインドフックにあるが，その支部がクルーと同様にデカールにある。

ここでは，1992 年に設立されたＮＧＯファースト・ピープルをより詳細に紹介する。これは，今までのサンが国家や地方政治のなかに代表者を持たなかったことや土地に対する権利を持つことが否定されてきたことを問題としてかかげ，国家政策に抵抗しようとする組織である。1993 年には，この団体はジョン・ハードバトルを代表者としてＮＧＯに登録される。そして，この組織の活動の目的として，サンがひとつの民族として社会のなかで認知されること，彼らの祖先からの土地の所有を確保して，自らの持続可能な発展をおしすすめることを挙げている。なかでも，サンが伝統的に自然資源を利用してきた土地を示す地図を制作することを通して，サンがこの土地の先住民であることを実証しようとする企てには注目してよい（池谷，2001：514-515）。

ファースト・ピープルは，デンマークの「固有の状況のための国際作業グループ」（International Work Group for Indigenous Affairs，IWIGIA イグギアと略する）の資金援助によって運営されている組織である。マネージャー（Manager），副マネージャー（Assistant Office Manager），ボードの議長（Chairman of Board），運搬オフィサー（Transport Officer），秘書（Secretary），運転手（Driver）の６名のサンから構成される。この他に，県内のデカール，ウエストハナハイ，ハンシー，カガエ，チョボカネ，カボから選ばれた，９名のナロ（サンの言語集団）と１名のコー（サンの言語集団）からなる 10 名のボード・メンバーがいる。ボードの会合では，活動へのお金の使い方や活動内容などが議論される。また，コンサルタントや法律家を雇って，円滑に活動を進めるための指導がなされる。

リザーブの外への移住に関わる問題は，ファースト・ピープルが取り組んでいる最も重要な課題である。現在，この問題を解決するために，リザーブ内のすべての集落の代表者から構成される交渉グループがつくられている。移住前の 1996 年現在，カデが２名，モラポが２名，メツァマノーが２名，モトメローが２名，キカオが１名，グカンバが１名，ホーペが２名となっている。しかし，カデとモトメローの人は，ニューカデへの移住を決めてカデへの１名を除いてファースト・ピープルからぬけている。そのかわりに，モトメローからカウデゥアネへ移住した２名が加わっている。つまり，すでに移住した３名もこの集団に入っているというアンビバレントな側面をもっている。

ファースト・ピープルの毎月の活動は，ボード・メンバーによる集会，土地権利の要求を求めるための話し合い，リザーブへのフィールド行，国内でサンが居住する他地域への視察，時には大統領や地方自治・住宅省の大臣に会うことなどから構成されている。

以上のように，ファースト・ピープルは，デンマークの財政援助のもとに，建前としては地元の先住民中心に成立したものであるが，その活動内容はデンマークのイグギアからの影響を強く受けている。

3．移住政策への先住民組織の対応（1996-2002 年）

ボツワナ政府は，1980 年代後半から現在まで，リザーブ内の地域住民の生活を維持することよりリザーブ内の野生動物の保護を優先し，住民をリザーブ外に移住させる政策を進めてきた（池谷，2001）。

リザーブの土地は，歴史的にみると，イギリス保護領ベチュアナランドの時代に，クラウンランドとしてイギリス王室の所有地とされていた（池谷, 2002a）。しかし，1950年代に牛が商品化されるにともない，牛の放牧地がリザーブ内に拡大していった。植民地政府は，1961年に，牛牧場の拡大を止めることで狩猟採集に依存するサンの生活を保護することをねらいとして，この土地をリザーブとして指定した。その面積は，約5万2千平方キロを示す。そして現在，人々の諸活動が活発になり人と野生動物との共存が難しくなると，そのなかに住む人々をリザーブの外へ追い出す必要が生まれてきた。リザーブ東側のホーペ付近ではダイアモンド資源の開発が進められているという不確かな情報が知られ，この他にも動物観光の可能性を高めること，人々への給水や食糧配給などのサービス提供を安くあげること，移住した人々がボツワナの社会に統合する事で経済的機会などを受けやすくする点なども，移住させる動機として挙げられている。

さて，これらの政策に，先住民組織や地域住民は様々な対応をしてきた。まず，1996年3月から5月にかけて，ファースト・ピープルのハードバトルとリザーブ内のモラポ（図2参照）に滞在するセサナの2人は，ボツワナ政府によるリザーブからのサンの退去を国際世論に訴えるために，スイスやアメリカを訪れている（池谷, 2001：515）。とりわけ2人は，スイスのジュネーブにある国連の人権オフィスに行き，政府によってリザーブから出ていくことを余儀なくされているサンの現況を訴えた。その結果、1996年5月に，ボツワナ在住のイギリス高等弁務官は，サンの人びとがどのような経緯でリザーブの外に出ているのかを調べるために，リザーブへ視察に行っている。これに対して，政府は，リザーブ内で滞在を望む人々は許されているように，強制的に移動させることはないと述べている。また同月に，同様な内容を紹介したアメリカCNNの放送があった後に，アメリカやノルウェーの大使がリザーブ内のカデを視察している。

1997年6月には，ファースト・ピープルがケープタウン在住の法律家を招いて，交渉グループのメンバーを募っての集会をデカールで開催した。その後，ファースト・ピープルは，同年7月8日付でリザーブの土地権を要求する手紙を，地方自治・住宅省の大臣に送るが，返事が来ないままに大臣は9月に引退している。また，9月には，ファースト・ピープルの資金源となっているデンマークのイグギアに所属する社会人類学者（スイス人）が約6週間の滞在を通して応援にかけつけていた。

同年9月下旬には，コンサルタントのハボローネ氏（ボツワナ大学在籍）の紹介で，交渉グループの人びとは，モレミ動物保護区の設立にともない移住させられた経験を持つ，ンガミランドディストリクトのクワイ村を訪れている。ここでは，サン自らが野生動物の管理をしており，これからの人と動物との関係を考える上で有用である。10月には，ファースト・ピープルは再び土地請求を記した手紙を政府に送る。

1998年3月下旬には，リザーブの交渉グループの人々が，コンサルタントらとともにボツワナのマシレ大統領に会っている。大統領は，ハンシーの議員を通して土地請求を願い出てほしいと述べている。この際に，彼は，土地請求を議論するために，地方自治・住宅省の大臣がサンの代表に会うようにと命令したともいう。

2000年になると，サンが土地権利を請求するうえで必要な情報をサン自らが収集するようにうながされた。ファースト・ピープルで働くサンの青年2名が，ＧＩＳによって地名の位置を測定する方法を習得して，サン自らが地名の入った地図を作成した。リザーブ内の現場で地名の採集および地名のつけられた場所を地図化する作業が行なわれたことになる。その結果は，上述したＮＧＯディチュワネロ作成の冊子にも (Ditshwanelo ed., 2002)，かつてのリザーブ内に暮らすサン集団のテリトリーを示す図として紹介されている。

ところが，2002年1月には，ファースト・ピープルの財政的援助をしてきたデンマークのイグギアが，2名を除いてすべてのサンを解雇したのである。また，事務所も経費節減のためにデカールにあるウイムサの事務所に移すことになった。ちょうど同じ2002年1月には，政府の役人が，1月31日からリザーブ内のサービスをすべて停止するという宣告をする。このため地域住民は，1月下旬にリザーブ内の村から区外への移住を開始している。2月には，ＮＧＯサバイバルが，政策批判のキャンペーンを開始する。

同年2月下旬，リザーブ内から外への移住がほぼ終了したが，3月上旬には，イギリス政府が，ボツワナ政府にリザーブ内に住むサンへの水の供給を停止しないようにうながす。そのころ，ＮＧＯサバイバルは，サンの移住は非合法的な行為であると述べている。その後，3月上旬には，ＮＧＯディチュワネロもまた，リザーブの住人が自然資源を利用・管理することが望ましいので，政府の野生動物・国立公園課の管理計画の精神に反するということで移住政策を批判する。

同年4月には，国連人権委員会（UN, Human Rights Commission）もまた，政府によるサンの移住に対して非難する。彼らは，同化政策によって危険にさらされており，自分たちの意志に反して移住をさせられたという。

ＮＧＯサバイバルもまた，リザーブを立ち去ろうとする人はいないと付け加える。しかし，ファースト・ピープルのメンバーが中心となって，移住を強くすすめ援助をとりやめた政府の行動に対して，リザーブ住人の土地権を獲得することを求めた裁判をおこしたが敗訴になっている。

このように，2002年１月の政府による移住政策は，1997年の政策より強行に住民をリザーブ外に移住させることをねらいとしていた。これまでＮＧＯによってその政策は激しく批判されてきたが，2002年４月時点においても，この問題は解決されないままに残されている[4]。

4．移住政策への地域住民の対応(2002年)

これまで述べてきたようにボツワナの外から持込まれた先住民組織という考え方と当事者であるサンの人びとの間には，考え方のギャップはないであろうか。また，サンのなかにリザーブを立ち去ろうとする人はいないというＮＧＯサバイバルの言説と，実際のサンの行動とのズレは存在しないのであろうか。ここでは，政府による移住政策へのサンの多様な対応を詳細にみることで，サンのなかにも多様な価値観が存在することを把握する。

4.1. 移住する人と居残る人の分化 (2002年１～４月)

2002年１月末のボツワナ政府による移住政策によって，リザーブのサンやカラハリは，様々な対応にせまられてきた。政策施行前の１月上旬，リザーブには約500人の住民が６集落に分かれて住んでいたが，１月末以降にモラポ（Molapo），キカオ（Kikao），モトメロー（Mothomelo）の３つの集落は，すべて住民の移動にともない廃村になった（図３参照）。

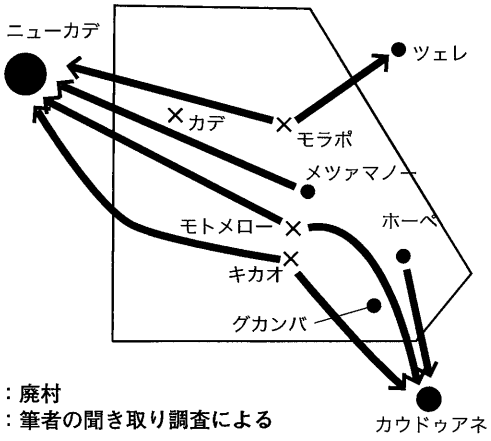

図３．中央カラハリ動物保護区の外側への人口移動 (2000～2001年)

筆者の観察および聞き取りによると，リザーブの住民の移住は，２月初めから３月にかけて集中的に行われている。メツァマノーでは２月４日から，モトメローでは２月６日から移動が始まっているが，３月６日時点においてすべての移動を終えてはいなかった。ホーペでは２月10日から２月25日までに移動がおこなわれ，モラポでは，２月４日から３月１日までの約４週間で全世帯の移動が終了した。

移住先については，モラポの多くの住民は，ニューカデに移動したが，ラコップス町近郊に新たにつくられたツェレ（Tsere）[5]に移動した世帯もある。モトメローやキカオでは，ニューカデとカウドゥアネに２分され，ホーペでは大多数がカウドゥアネ（Kaudwane）に移動している。また，移動手段としては，政府所有の数台の大型トラックが使われた。トラックの荷台には，家屋のフレームに使っていた木や家財道具一式，それにヤギや馬やロバやニワトリなどの家畜がのせられた。各集落で飼われていた犬は廃村に残された。

一方で３つの集落では，新集落への住民の移住はみられたものの，73人がリザーブに残って暮らしている。その内訳は，20人（11人のサンと９人のカラハリ）がメツァマノー，35人（すべてサン）がホーペ，18人（すべてカラハリ）がグカンバである。

移住するか否かの対応の違いは，サンとカラハリという民族集団の違いによるのではなくて，集落内の社会的結合の強弱に強く関与していると考えられる。廃村になったモラポは，2001年にニューカデへの移住者がすでに出ていて集落全体のまとまりが弱く移住にふみきったと考えられる。これに対して，メツァマノーやグカンバでは村のリーダーであるカラハリの古老が移住に反対していたので，その親族や友人を含めて移住を拒んだものであると思われる。

4.2. 政策に抵抗して居残る人びとの生活

リザーブ内に残された３つの集落の社会構成は多様である。メツァマノーでは（図２参照），カラハリとサン[6]という異なる２つの民族集団から構成されている。ホーペではサンの数世帯が行動をともにすることになった。グカンバは，カラハリの一族からなる。

このうちメツァマノーの総人口は，2002年３月現在，

約50人を示す。世帯単位では，夫妻がともにいる場合は少なく，リザーブ外に妻が移住して夫は集落に残っている事例が多い。また，カラハリのM氏を中心にしてその親族が残ると同時に，彼らとのつながりが深いサンが居住している。なお，M氏の息子は，水を運搬できる1台の車をリザーブ内で所有する。

集落パターンでは，パンと呼ばれる窪地に隣接して小集落が3ヵ所に分散して立地する。2001年にはサンとカラハリのあいだに，はっきりとした居住地の住み分けがみられたが，政策施行後の2002年3月には，サンがカラハリに近接して居住している。

住民は，雨季のために降雨後に，パンと呼ばれる窪地にたまった水をドラム缶に蓄えて利用する。住民の生業複合は，サンとカラハリでは異なっている。サンは，弓矢猟，罠猟，犬猟などを，カラハリは農耕や騎馬猟に従事する。また，サンはカラハリの畑の見張りや小動物の皮なめしの手伝いをする一方で，畑の収穫物を自由に利用している（池谷，2005）。

以上のようにメツァマノー集落では2002年2月以降，政府による援助が完全に停止しているが，自らが様々な生業を組み合わせて，水や食糧の補給を行って暮らしている。

4.3. 新集落での社会経済変容

移住先のひとつニューカデは，1997年に建設された集落であり（池谷，2001），すでにここには1600人が居住していた[7]。モラポの人は，各世帯ごとに新たな区画が与えられほぼ同じ地区に集住してすむようになり（図4（a）参照），彼らの家屋や家畜囲いなどの財産に応じて補償金が与えられた。その額は，あるサンの場合の1万プラ（1プラ，24円に相当）からあるカラハリの21万プラまで大きな違いが認められる。その金は，飲酒で使い果たしてしまう人もいれば，中古車（28,000－45,000プラ）や馬（2600プラ）を購入する人などがいる。

モラポ出身者では，9人のカラハリが政府の補償金によって車を購入しているが（表1），サンは所有していない。これらの9人のうち，4人は車を持ってモラポ村にもどっている（表1）。なかでも，5と6は母子，1と2や7と8は兄弟関係になっている。運転手は，2を除いてすべて親族の青年などが雇用されている。

また，モラポ住人のなかの10世帯は，上述したツェレ（Tseve）への移住を選択した。住民は，自らの親族がいて土地になれているラコップス町に近い移住地を希望して，政府によって認められた。そこには水供給のタンクがおかれ，2週間に一回，給水車がくるようになっている。また政府によって主食となるトウモロコシの粉などが配給される。その後，ツェレーには，同じ集落の出身者で近くの牛飼育農場で働いていた人びとが移住してくることで，集落人口の増加と新たな社会関係が生まれている。

表1．ニューカデにおける車の所有者と母村への帰還の有無

氏名	民族集団	保護区への帰還の有無
1.Kobou	K	○
2.Sesi	K	○
3.Shieho	K	○
4.Tareraho	K	○
5.Gu	K	×
6.Nomu	K	×
7.Tam	K	×
8.Sistara	K	×
9.Chokucho	K	×

K：カラハリ
出所：筆者の聞き取り調査による

ここで，1998年と2001年におけるニューカデの居住地の拡大や住民構成の変化をみてみよう（図4参照）。まず，年代の異なる2つの図を比較してみると，1998年には集落内に点在していた人に占有されていない区画が，2001年には居住によって埋められ，集落の中心部にある小学校の東側の地区に新しいプロットが開かれていることがわかる。ここの居住者は，カラハリが暮らす地域であるという（図4参照）。また，各プロットの民族構成をみてみると，診療所（病院）の北側や西側において1998年はガナとグイが混住しているのに対して，2001年ではすべてガナが居住している。これらは，この期間の変化であると思われるが，調査者による民族集団の判定基準に違いがあるとも推定される。

4.4. ヤギを連れてリザーブにもどる人，もどらない人（2002年8～10月）

ところが，リザーブからの新たな移住者にとって新集落ニューカデは，暮らしやすいものではなかった。ニューカデはわずか5年という新しい集落であるが，さまざまな理由によって死亡者が多いのも事実である。経済生活ではウシ飼育が中心となり，原因不明であるがヤギの死亡が多い。モラポ出身者のなかのカラハリにとって，ヤギの死亡が政府の移住政策とは裏腹にリザーブ内にもどる動機のひとつになっている。

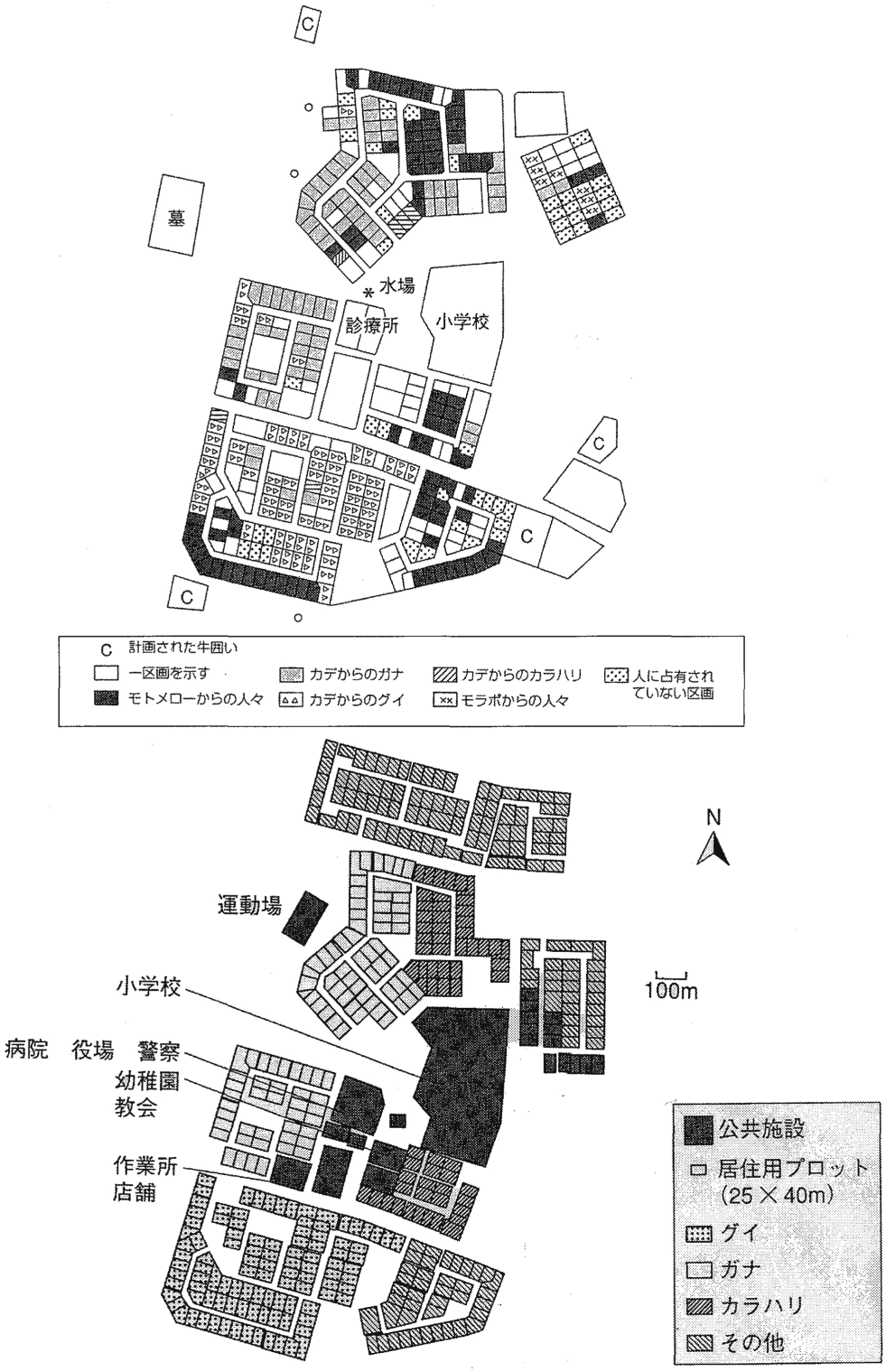

図4．ニューカデ（コエンシャケネ）集落における居住地および居住者の変化（上：1998年，下：2001年）
出所：1998年の資料は池谷（2001：520），2001年のそれは丸山（2004：251）による

ニューカデからリザーブ内のモラポとメツァマノーへの移住（集落への帰還）は，2002年5月に始まった。まずKO，SEの兄弟の家族にその母親KA，次にKAとSHの親子の家族，さらに，SH所有の車でNE，TA夫妻，その後，TAの車でKA，RI夫妻の順である。その際に，若い家族の場合には，ニューカデの小学校をやめさせて子供も連れて移住している。その際に，リザーブの入場者を管理している野生動物局では，リザーブへの入場を拒むが，ここは「私たちの住み場所である」ということで，リザーブ内のかつての集落に帰還できている。

リザーブに戻る際には，車が不可欠であるために，車を所有するカラハリが，ひとつの移住の際に集団の柱になっていることを指摘できる。移住するサンは，車代として現金（1回，1000プラ）を支払う場合と親族であるために支払わない場合とがある。ヤギもまた車をつかって集落に運搬している。あるカラハリの場合，30頭のヤギを2回にわけて車で運び，のこり半分のヤギはニューカデに残している。

一方で，居住者の居残っているメツァマノーでは，上述したように男性が集落に滞在する例が多かったので，カラハリとサンの女性がニューカデからリザーブ内の集落にもどっている。その際に，政府から保証金を受けとった人もいれば，受けとっていない人もいる。また，カラハリのなかには新集落に居住はしているが，ヤギのみをメツァマノー在住のサンに飼養させている人が現れている。

2002年11月にモラポには，約40人が帰還している[8]。カラハリは20人，サンは20人から構成される。また，新しいモラポは，3つの集落から構成され，2つのヤギ囲いが作られている。馬やロバは，ニューカデにおいているのでまったくいない。モラポ住人は，以前住んでいたところの近くにそれぞれ新たな小屋をつくる。小屋の形は，すべてドーム型である。雨季には集落の近くの窪地に水がたまるので，それを利用しているが，水の供給が不足すると車を使ってラコップス方面のツェレに水くみに行くことが多い。

このように，現在リザーブに暮らす人びとは，移住政策のあいだも居住つづけている人びとと，一度は新集落に移住したもののリザーブ内の集落に帰還している人びとから構成されている。現在，移住政策に抵抗する彼らはボツワナ政府によってまったく無視されてはいるものの，リザーブ外の新集落とリザーブ内集落とのあいだに，ヤギの委託関係のような新たな関係を生みだしている点が注目される。

5．国家，NGO，先住民の相互関係と生態人類学

本稿では，南部アフリカのサンのなかで，ボツワナのサンを対象にして，先住民組織の活動内容からみた運動の実態，および2002年度を中心とした移住政策へのサンやカラハリの多様な対応を把握してきた。ここでは，(1) サン社会にとっての先住民運動の意義，(2) リザーブの利用や所有をめぐる権力関係，(3) 国家・NGO・先住民の相互関係のなかで地域の生態を把握する役割について考察する。

5.1. 越境する先住民運動とその意義

1999年3月20日，南アフリカのムベキ副大統領（現，大統領）は，白人入植者によって先住地を奪われたサンのコミュニティーに対して，約4万ヘクタールの白人農場を買い上げた土地を返還する文書に著名した。また，その北に隣接するカラハリ・ゲムスボック国立公園（図1参照）内の2万5千ヘクタールの土地も返還されることになっており，そこでは観光産業によるサンの収入の創出をはかる予定とされている。

これは，アフリカではじめてサンのような先住民に土地が返還された例である。南アフリカのサンは，自らの人権や土地権をとりもどすために，政府に対して先住民運動を行なってきた。すでにカナダやオーストラリアなどの先進国の先住民では権利獲得に成功をおさめているが，近年，グローバル化が進むにつれて，その運動は南アフリカにも広がり成功をおさめたのである。

それでは，この運動は，サンが居住する南アフリカ以外の国ではどうであろうか？サンは，ボツワナ，ナミビア，アンゴラなどの南部アフリカ各地に広く暮す先住民として知られている。現在，ボツワナのサンの場合では，狩猟採集に従事するとしてもその比重は小さく，政府による配給食料に依存している人がほとんどである。

ここでは，上述してきたボツワナのサンの生活のなかでの先住民運動の意義について考察する。先住民運動が，どのようにして村びとに関与していたのであろうか。村レベルでみると，本論でも詳しく述べたが，反対運動という活動を具体的には何もせずファースト・ピープルの活動にもあまり関心のない人びとがリザーブにとどまっている点に注目してよいだろう。筆者は，このような態度を“静かな戦い“と命名した（池谷，2002b）。

その一方で，ファースト・ピープルのような先住民組織に従事するサンはリザーブの外の移住先に暮し，安定した給与を得ることができる。もちろん，彼らは，現地に視察に行き，地名収集のような調査を実施するのであ

るが，彼らの擁護によって，前節で述べたようなサンやカラハリの人びとがリザーブ内のかつての土地にもどっているわけではない。彼らは，ヤギの群れの維持のために，かつての住み場所にこだわっているがゆえに戻っているのである。

以上のことから，筆者は，移住政策に抵抗する人びとと抵抗しない人びと，土地権を求める人びととそうでない人びと，かつての住み場所に帰還する人びととそうでない人，様々な形の価値観が地域住民のなかにお互いに併存していることを指摘する。とりわけ先住民という概念は，先進国のなかで生まれたものであり，ボツワナのサンやカラハリのような地域住民がそれを理解することは難しいという点を強調したい。本稿で述べたように，移住した人びとが補償金を受け取ったあとに勝手に元の居住地にもどっている点などは，私たちの考え方との違いをよく示している。

また，同じ先住民といっても狩猟採集民サンとバンツー系の農牧民カラハリとの対応の違いには，ヤギや車の所有の有無が左右しているようにみえる。本稿の事例では，家屋の数や家畜囲いなどの量で補償金額の大きさが左右されるので，補償金の少ないサンは独自にはリザーブ内に戻れないのに対して，車を所有するカラハリは自力で戻るのか否かを選択することができることを示している。

上述したように，1999年に，南アフリカでサンの運動が成功をおさめた後に，この運動は南部アフリカ諸国に波及すると思われた。しかし現時点では，運動に成功しているのは南アフリカのみである。現時点において，ボツワナのサンは土地権裁判に成功をおさめてはいない。また，この種の運動の仕掛け人や財政的支援には，ヨーロッパ諸国のＮＧＯも関与するために，それらの運動の背景とＮＧＯの活動とのかかわりあいを無視することはできない。ファースト・ピープルの場合は，デンマークの財政的援助のもとに，デンマークから派遣されたコーディネイターのもとに数人のスタッフがいること，土地権請求運動が活動の中心であったが，現在では，（外部からの何らかの圧力が加わり）財政援助の縮小にともない活動は縮小している。

5.2. リザーブの本当の利用者や所有者は誰か？

近年，わが国では様々な環境利用や所有をめぐるレジティマシー（正当性）の論理を探る議論が盛んである。東アフリカでは，ケニアの先住民マサイが100年以上前に手放した土地（ライキピア地方）に対して，現在の正当な所有者は誰かに関する検討がなされる（松田，2005）。現在のマサイと白人とのあいだの土地紛争の経緯とその影響，および植民地時代以降現在までの政府とマサイとのかかわりの変遷が，文化表象の政治学という枠組みから紹介される。その結果，土地の権利の正当性の根拠としていわれる「真正な伝統文化」に対しては，現地の住民の生活意識のなかで編み出される「生活文化の真正さ」を新たに土地所有の正当性の基準とすることを提唱される。つまり，その正当性は現地の住民生活を考慮して判断すべきであるという。

本稿で対象としたボツワナのサンの場合，100年前のマサイのように当時の植民地政府とのあいだに土地に対する取り決めはみられない。しかし，過去100年余りの環境利用とそこでの権利の歴史的変化について貴重な資料を提供してくれる。植民地化以前のリザーブは，バクゥエナ首長国の保護区であり，サンは毛皮などの形で税を納めることによって土地の利用権を獲得していたともいえる（池谷，2002a）。その後，その場所はイギリス保護領になったことで，クラウンランドに指定されたが，植民地以前の慣行は維持されていたものと思われる。その後，1961年のリザーブの指定によって，地域住民の利用権は引き続いて政府によって保護されてきたことになる。しかし，近年では，ボツワナ北東部の世界遺産ソォディロヒルズの事例のように（池谷，2004），国内においても住民参加の文化財保護が積極的に求められている場合があるが，本稿が対象とするリザーブ内での人びとの滞在は，観光を除いて否定されているのである。このため，現在，進行中の先住民組織と政府とのあいだの裁判によってリザーブの本当の利用者が決められるといってよいだろう。

5.3. 生態，民族間関係，権力関係—生態人類学の新たな枠組み—

21世紀のサン社会は，グローバルな先住民運動の影響を受けながら，様々な問題に直面してきた。ボツワナという国民国家のなかで，自らの経済的自立を保持し，自らの政治的権限の獲得のためにサンの苦悩が続いているといわれる（池谷，2007印刷中）。しかし，本稿で述べたように，これらの捉え方には多くの問題が内在している。国家政策へのサン社会の対応のあり方は一筋縄にはいかない。同時に，対象をサン社会に限定することなくカラハリ社会とも切り離して考えることはできない。

現代のサン社会を生態人類学的に把握する際に，自然環境への生業活動の適応という文化生態学の枠組みは，現在においても自然に強く依存してリザーブ内に暮らす人びとに対して有効なアプローチである。しかし，近年のリザーブ内外でのサンやカラハリの人口移動とその背景を理解するためには，「自然と共存するサン」「動物を

乱獲するサン」のような言説が，従来の生態人類学の研究とは異なるレベルで広く使われている点に注意しなくてはならない。これらが，保護区をめぐる権力関係の構図のなかで，誰によってどのように利用されているのかを把握する必要がある。筆者は，リザーブ内での狩猟活動を中心とした生業活動の生態人類学の研究によって，カデ集落の周辺では砂漠化が生じているが，現地の人びとはそれを問題としていないことを明らかにしている（池谷，2002a）。また，政策決定当時のリザーブ内で行なわれていた狩猟が乱獲であるということを断言できるような実証的研究を知らない。

現在でも，ボツワナ政府の移住政策は，サバイバルのような国際ＮＧＯによって批判されているが，住民は，リザーブ内にとどまることや元の集落に帰還することで政策に反対してきた。しかし，先住民組織に属する人びとは，リザーブ内に暮らすことなく政府の提供した集落でサービスを享受しながら反対しているという形をとっている。今後，リザーブ内住民が，政府に対して土地権を獲得するという意識に芽生え，その獲得には裁判が必要であるということを学ぶ可能性は十分にある。そのときにこそ，先住民組織に属するサンの人びとは，リザーブに暮らすサンを含めての代表として本来の意味をとりもどすものであろう。

筆者は，21世紀のアフリカの人びと（狩猟採集民や牧畜民や農耕民など）の変わりつつある生活を対象にした生態人類学的研究では，あくまでも地域の生態調査をベースにしながらも民族間関係を考慮して，政策，ＮＧＯ，住民の相互関係を把握する枠組みの中で住民の周囲で見え隠れする権力構造まで把握することが不可欠であると考えている。

謝辞

本調査は，2002年度における科学研究費補助金（課題番号：13680097）によって執行することができた。現地調査の許可をあたえてくれたボツワナ政府および調査の際に時間をさいてくれた現地の多くの人びとに感謝します。

注

1）「先住民をめぐる論争」とは，サンのような人びとに先住性という範疇を当てはめるのは間違っているというアダム・クーパーとそうではないというケンリックやルイスの論議である。人類学では，様々な意味で indigenous（先住の，在来の）という言葉を使ってきた。クーパーは，この言葉のかかえる問題点を指摘する。先住民であるから土地権利が許されるのはなくて，その土地がすでに彼らの土地であるので権利が許されるのである。国民国家は，一般的にサンのような人びとに土地の所有権を認めることはないのである。

2）リザーブ住民の移住地の名前については，ニューカデとコエンシャケネという２つの呼び名があるが，本稿では行政上の名称であるニューカデを使用する。なお，近年の牧畜民を対象にする生態人類学においても，難民の集まる移住地（カクマ難民キャンプ）内での牧畜民と近隣集団との社会経済関係を把握する研究が盛んになっている（Ohta, 2005a,2005b）。しかし，そこはニューカデの人口の約50倍の大きさの人口約８万人の都市的集落であることに注意しよう。

3）政治生態学は，ポリティカルエコロジーと同義である。しかし，これらの用語の使い方をみると，研究者によって定義が異なり，その使われ方は様々である（池谷，2003a: 23）。わが国においては，生態と政治経済を統合しようとするこの視角の特徴から，狩猟採集民の生態人類学（市川，2003）と農民の政治経済学（島田，1999）という２つの視角の中でこの用語が使われているが，両者の間では方法論をめぐる論議には発展していない。

4）2003～2005年におけるボツワナの中央カラハリ動物保護区をめぐる問題の最新動向に関しては，別稿を参照されたい（Hitchcock *et al.*, 2006）。ここで，主なものを列挙しておく。2003年９月，ボツワナの首都ハボローネにてコイサン会議が開催される。その際に，ファースト・ピープルのロイ・セサナ氏のほかに政府の関係者が参加をして，きわめて政治色の強い会議になる。ロイ・セサナ氏は，土地権請求の重要性を訴える。2004年７月，ニューカデにおいて先住民の権利を訴える裁判が行われた。ベチュワナランドの行政官であったシルバーバウアー氏が先住民側の証人になる。同年８月には，ロイ・セサナ氏ほか，裁判のための資金集めのためにアメリカを訪問する。2005年から2006年７月までは，裁判が続けられてきたが，その決着はまだついていない。

5）ツェレ集落には，ラコップス町近郊のカランガの農場に暮らしていた人びとも移住してきた。現在では，小学校，診療所などのある集落になっている。

6）ここのサンはグイやガナではなく，ハイヌーという集団が対応する。

7）ニューカデの人口に関しては，確かな統計はない。2000年４月に，ニューカデで存在の確認できた人は，1002名であるとされる（高田，2002: 90）。

8）2006年２月現在，リザーブ内に滞在していたモラポ住民は，再度ニューカデ集落に移動しているが，メツァマノー集落やグーカンバ集落の住人のなかには，現在でもリザーブ内にとどまっている人がいることに注意しよう。

参考文献

史料（新聞）

Cape Times 22 March, 1999

The Midweek Sun Wed., 6 March,2002
The Botswana Guardian, 8 March,2002
Mmegi, 15-21 March, 2002
Mmegi 05-11 April , 2002
The Midweek Sun Wed. 24 April, 2002

文献

池谷和信 (1999)「カラハリ砂漠のアーティスト」中牧弘允編『越境する民族文化』千里文化財団 , pp.50-55.

池谷和信 (2001)「リザーブから出る人、出ない人ーボツワナの移住政策とサン社会—」和田正平編『現代アフリカの民族関係』明石書店 , pp. 511-530.

池谷和信 (2002a)『国家のなかでの狩猟採集民ーカラハリ・サンにおける生業活動の歴史民族誌ー』国立民族学博物館研究叢書 .

池谷和信 (2002b)「カラハリ先住民の“静かな”戦い」『季刊民族学』100: 89-101.

池谷和信 (2003a)『山菜採りの社会誌ー資源利用とテリトリーー』東北大学出版会 .

池谷和信 (2003b)「石器時代人としてのサンの表象について」スチュアート・ヘンリ編『野生の誕生』世界思想社 , pp.50-70.

池谷和信 (2004)「世界遺産・ボツワナの岩絵と地域住民との関係にかかわる予察的報告」『日本アフリカ学会第 41 回学術大会研究発表要旨集』p. 93.

池谷和信 (2005)「ブッシュマンとカラハリ農牧民との交渉史」田中二郎ほか編『遊動民』昭和堂 , pp. 68-85.

池谷和信 (2006)「変貌するアフリカと生態人類学の新たな枠組み」『アフリカ研究』68:83-86.

池谷和信 (2007 印刷中)「ボツワナ・サンー狩猟採集民から先住民へ」福井勝義・竹沢尚一郎編『サハラ以南アフリカ』(講座ファーストピープルズー世界先住民の現在), 明石書店 .

市川光雄 (2003)「環境問題に対する３つの生態学」池谷和信編『地球環境問題の人類学—自然資源へのヒューマンインパクト』世界思想社 , pp. 44-64.

岩井雪乃 (1999)「自然保護区と地域住民の生計維持ーセレンゲティ国立公園とロンバダ村の事例」『アフリカ研究』55: 51-66.

岩井雪乃 (2001)「住民の狩猟と自然保護政策の乖離ーセレンゲティにおけるイコマと野生動物とのかかわり」『環境社会学研究』 7 : 114-128.

島田周平 (1999)「新しい農村研究の可能性を求めてーポリティカルエコロジー論との交差から」池野旬編『アフリカ農村像の再検討』アジア経済研究所 , pp. 205-254.

菅原和孝 (2004)『ブッシュマンとして生きる』中央公論新社 .

高田明 (2002)「セントラル・カラハリ・サンにおける社会変容ー人口動態、生業活動、乳幼児の体重の分析から」『アフリカ研究』60: 85-103.

西崎伸子 (2001)「人と土地を分かつ自然保護ーエチオピア、センケレ・スウェニーズハーテビースト・サンクチュアリーと地域住民の関係」『アフリカ研究』58: 59-73.

服部志帆 (2004)「自然保護計画と狩猟採集民の生活ーカメルーン東部州熱帯林におけるバカ・ピグミーの例から」『エコソフィア』13: 113-127.

松田素二 (2002)「支配の技法としての森林保護ー西ケニア・マラゴリの森における植林拒否の現場から」宮本正興・松田素二編『現代アフリカの社会変動』人文書院 , pp. 323-344.

松田素二 (2005)「土地の正しい所有者は誰か：知の政治学を越えてー東アフリカ・マサイ人の土地返還要求の事例から」『環境社会学研究』11: 70-87.

丸山淳子 (2004)「命をさがす人びとー再定住地の内と外の暮らし」田中二郎ほか編『遊動民』昭和堂 , pp. 249-267.

丸山淳子 (2005)「南部アフリカ狩猟採集民サンの再定住にともなう社会関係の再編」『日本アフリカ学会第 42 回学術大会研究発表要旨集』p. 112.

Akiyama, H. (2001) "The influence of schooling and relocation on the G/ui pupil companionship," *African Study Monographs*, Suppl., 26: 197-208.

Arhem, K. (1985) *Pastoral Man in the Garden of Eden -The maasai of the Ngorongoro Conservation Area, Tanzania*, University of Uppsala.

Cassidy et al. eds. (2001) *An Assessment of the Status of the San/ Basarwa in Botswana*, Legal Assistance Centre.

Corry, S. (2003) "Reaction to: Kalahari conundrums," *Before Farming* 2003/2(14): 13-15.

Dieckmann, U. (2003) "The Impact of Nature Conservation on the San: A Case Study of Etosha National Park," Hohmann, T. ed. *San and the State: Contesting Land, Development, Identity and Representation*, Rudiger Koppe Verlag Koln. pp. 37-86.

Ditshwanelo ed. (2002) *Central Kalahari Game Reserve*, Ditshwanelo Focus Seminar Series.

Hitchcock, R., K. Ikeya, R. Lee, M. Biesele eds.(2006) *Updating the San: Image and Reality of an African People in the 21st Century*, Senri Ethnological Studies no. 70. National Museum of Ethnology.

Hohmann, T. (2003) "San and the Sate," in Hohmann, T. ed. *San and the State: Contesting Land, Development, Identity and Representation*, Rudiger Koppe Verlag Koln. pp. 1-35.

Ikeya, K. 2001 "Some changes among the San under the influence of relocation plan in Botswana," *Senri Ethnological Studies* 59: 183-198.

Kenrick, J. and J. Lewis (2004) "Indigenous peoples' rights and the politics of the term 'indigenous'," *Anthropology Today*, 20(2): 4-9.

Kuper, A. (2003) "The return of the native," *Current Anthropology*, 44: 389-402.

Maruyama, J. (2003) "The impacts of resettlement on livelihood and social relationships among the central Kalahari San," *African Study Monographs*, 24(4): 223-245.

Ohta, I. (2005a) "Multiple Socio-Economic Relationships Improvised between the Turkana and Refugees in Kakuma Area, Northwestern Kenya," in Ohta I. and Gebre Y. D., *Displacement Risks in Africa -Refugee, Resettlers and Their Host Population*, Kyoto University Press, pp. 315-337.

Ohta, I. (2005b) "Coexisting with Cultural "Others": Social Relationships between the Turkana and the Refugees at Kakuma, Northewest Kenya," *Senri Ethnological Studies*, 69: 227-239.

Suzman,J. (2002) "Kalahari conundrums:relocation, resistance and international support in the Central Kalahari Botswana," *Before Farming* 2002/3-4(12): 16-25.

(Summary)

Political Ecology of Kalahari Indigenous People in the Nature Reserve, Botswana

Kazunobu IKEYA
National Museum of Ethnology

In recent years, the most strongly debated land claims between the government and the San (Basarwa) have concerned the Central Kalahari Game Reserve (CKGR) in Botswana. Some local residents complain of a government relocation policy that promotes relocation outside the CKGR. Information regarding the social and environmental histories of CKGR is crucial to solve arguments surrounding the policy.

This paper aims to clarify the strategy of adaptation among the San and the Kgalagadi under the influence of the Relocation Plan in the CKGR. Results have revealed the following points.

The relocation policy by the Botswana government in January 2002 has obliged the San and Kgalagadi in the reserve to take various actions. While about 500 people moved to three settlements built outside the reserve, 73 people stay in the reserve. They include: 20 in Metsamaneng, 35 in Gope, and 18 in Gukanba. On the other hand, Molapo, Kikao, and Mothomelo were abandoned through displacement. The difference in these actions is considered to relate to the social characteristics of each settlement.

Later, some returned from New Xade to Molapo, while not otherwise. Those who returned centered their re-migration on a Kgalagadi who owned a vehicle. A similar new settlement pattern to pre-migration areas has been formed in once-abandoned Molapo.

Differences of the degree of livestock-raising and social unity are important for decisions concerning movement outside the CKGR.Reasons for strong agro-pastoralist resistance against the policy are discussed considering some materials gained by author interviews and observations in the CKGR.

It is supposed differences in actions by the San and the Kgalagadi are attributable to the possession of goats or vehicles. Because the amount of compensation was determined by the number of houses and livestock enclosures in this case, the San with little compensation could not return to the CKGR by themselves. On the other hand, Kgalagadi who owned a vehicle could choose to return or not for themselves.

In the present cases, the San have remained in the CKGR, as in Metsamaneng, or have returned to original settlements, as in Molapo, by having a coexistence relation with the Kgalagadi. Thus, this study has revealed that the coexistence relation between the San and Kgalagadi has held great importance in forming a movement module or resisting the relocation policy. Moreover, the fact that the Kgalagadi returned to the original settlement for the grazing land for goats suggests that dependence on goat breeding is a great motivation of their movement.

In recent times most of the Kgalagadi identify themselves the San to outsiders.As a result, many report do not mention the differences of the San and the Kgalagadi. I think the image of the San in CKGR issue will be modified by the study of the diverse reality of people in the reserve.